
若き禿の悩み

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若き禿の悩み

【Nコード】

N13810

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幸三はまだ十七だが自分の髪の毛のことで悩んでいた。それはかなり深刻で。実際に二十歳前でもくる人はきまず。怖いお話です。

第一章

若き禿の悩み

和田幸三には悩みがあった。

それが何かというのだ。額であった。

「あんたひよっとしてまた」

「気のせいだよ」

家で夕食を食べている時にだ。自分の向かい側に座っている母の言葉に応えたのだ。むっとした顔で。

「それはさ」

「けれど実際に」

「だから気のせいだよ」

またむっとした顔で言うのであった。

「それはさ」

「額大丈夫なの？」

「あのさ、俺まだ十七だよ」

彼はこう返すのだった。

「十七で何でそうなるんだよ」

「十七でね」

「そう、十七ね」

「それで何で禿るんだよ」

自分で言ってしまった。このことをだ。

「高校三年でさ」

「いや、そうも言うてはいられないぞ」

彼にそっくりの父親が言ってきた。見ればその額は。

「お父さんだってな。結婚してから急にだったからな」

「そうよね。二十三で結婚してね」

「三十にはこれだ」

額はそのままつむじにまで達していた。てかてかと光ってさえい

る。

「うちの家系は代々かなりの若禿だからな。御前もな」

「禿るっていうのかよ」

「そうよ。若いうちに来るのよ」

母親がまた言ってきた。

「だから覚悟はしておきなさい」

「禿てたまるか」

再びむっとした声で言う幸三だった。

「しかもまだ高校生でな」

「けれどお兄ちゃん額広いよ」

今度は横からだった。見ればまだ中学生と思われる年齢の女の子がいた。その娘が明るい声で彼に対して言ってきたのである。その額のことをだ。

「やっぱりそれはね」

「隠せないっていうのかよ」

「髪の毛おろしてもね」

身も蓋もない言葉であった。

「そのままだとあと二年かな」

「二年でどうなるんだよ」

「ほら、あの人」

言っではならない名前を出すのであった。

「ドラゴンズのエースだったね」

「川上かよ」

「それか和田ね」

どちらも中日だった。

「和田さんみたいになるよ」

「いきなりとんでもない奴の名前出すな」

中日の和田の名前を聞くとことさら不機嫌な顔になる彼だった。

「あそこまでなるか、だから俺はまだ十七なんだぞ」

「なるわよ」

「それは運命だ」

ここで両親は無慈悲なことを言ってきた。

「それでもね」

「受け入れることが大事だからな」

「禿てたまるか」

まだ言う幸三だった。

「禿は絶対に嫌だからな」

「育毛する？」

今度はこんなことを言ってきた妹だった。

「それだったら」

「何度も言うが十七なんだぞ」

幸三の言葉は続く。

「それで何でなんだよ」

「まあまあ。私だってさ」

妹はまた話してきた。

「額広いんだし」

「それがどうしたんだよ」

「血筋は否定できないから。むしろ両親がわかっていいって思うべきよね」

「女は禿ないからいいよな」

「はい、自分で言っただし」

笑いながら速攻で突っ込みを入れる妹だった。

第二章

「そんなに気になるんだったら出家する？それで将来の仕事はお坊さんね」

「冗談で言ってるのか？」

「半分冗談だけれど半分本気よ」

妹は素っ気無く返した。

「出家はね」

「それ以外の半分は何なんだよ」

「だから髪の毛よ」

やはりそれであった。

「覚悟しておくことね」

「ちっ、髪の毛の毛って言いやがってよ」

家族の言葉を受けて慥然とした顔になっていた。しかし実際にその額を前髪をおろしてそのうえで隠している。そのことは隠せないものだった。

学校でもだ。皆彼に対して言うのであった。

「御前さあ、やっぱりさ」

「まずいだろ」

「まずいつていうか危ないよな」

「ロツクオンされてるよな」

軍隊の用語まで出て来ている。

「危険度でいったらもうイエローだよな」

「六段階で五段階目ってところだな」

「かなりやばいな」

「そうか、十七でか」

「ここまで来るのか」

「あのな、俺は違うからな」

ムキになって返す幸三だった。家でのやり取りと同じだ。

「禿とかじゃないからな」

「いや、禿だろ」

「若禿だろ」

「ヤング志村だな」

拳句にはこう言われる始末だった。

「中居みたいになつてな」

「もう少しでだよな」

「好き勝手言ってくれるな」

周囲に言葉にいい加減頭にきていた。そうしてであった。

「本当にな」

「まあ髪の毛がなくても生きられるからな」

「安心していいからな」

「気にするなよ」

「気にするなな」

それをまた話すのであった。

「そこまで言つてかよ」

「ほら、育毛な」

「あと鬘な」

「幾らでもあるからな」

クラスメイト達は口々に言う。

「俺達も将来どうなるかわからないけれどな」

「まあ御前はもう間違いないからな」

「絶対にな」

「いや、俺は禿ない」

意固地になつて断言したのだった。

「絶対にだ」

「禿は運命だからな」

「特に御前はそうだからな」

「あと数年か」

タイムリミットまで告げられたのであった。

「高校卒業までもつかないか？」
「あと少しだし、いけるんじゃないのか？」
「そうか？」
「何度も言うが禿じゃないんだよ」
あくまでこう力説する。本人はだ。
「俺はな。それは言うからな」
「自分ではそう言うからな」
「まああれだよ。禿でもしっかりしていればいいさ」
「禿で下品だったなら最低だけれどな」
「いや、それは禿以前だろ」
すぐに突っ込み返した幸三だった。
「それこそあれだろ？味噌汁茶碗に痰吐くような奴だよな」
「実際にそういうのいるからな」
「そうだよな」
「信じられない位下品な奴な」
「そういうのにはなるなよ」
クラスメイト達も今度は真面目な顔である。それはするなというのだ。

第三章

「御前は髪の毛以外は問題ないしな」

「ああ、それ以外はな」

「何も悪いところはないからな」

「それでも髪の毛はなのかよ」

またむっとした顔になった彼だった。

「駄目だっというのかよ」

「駄目っというか御臨終だよな」

「ああ、冥福を祈るっというかな」

「そうした状況だよ」

「またそれかよ」

彼のむっとした言葉は続く。終わることはなかった。

「禿は避けられないっというかよ」

「だから諦めろ」

「いいな」

「くそっ、何てこった」

クラスでもこんな話をするのだった。とにかく幸三の髪の毛のことは皆が言っていた。そして本人が一番気にしていた。そうして毎日鏡の前で。

必死に髪の毛を垂らしていた。妹はそれを見て言うのであった。

「必死ね」

「何だよ」

後ろから言ってきた妹に対して返した。鏡に映る彼女を見ながらだ。

「何か文句あるのかよ」

「そうやって毎日努力してるのね」

「悪いかよ」

すぐに言い返す彼だった。

「それがよ」

「無駄な努力ね」

実に残酷な言葉であった。

「本当にね」

「おい、何だよその言葉はよ」

「このままだと二十歳前にはどうしようもなくなるから」

「だからだっというのかよ」

「それよりもよ」

鏡に映る妹は壁によりかかっていた。そのうえで歯を磨きながら言うのである。彼女もまた鏡に映る兄を見ながらだ。その姿を見ながら話している。

「アルバイトしてね」

「ああ」

「それで育毛したら？」

「こう言うのだった。」

「髪の毛をね。それでどうかしら」

「育毛か」

「そう、育毛」

それであるというのだ。

「そんな努力するよりね。あとは鬘ね」

「禿ることは前提なんだな」

鏡の向こうの妹に対して懽然として返す。

「それはな」

「そうよ、もう逃げられないから」

「そこまで言うのかよ」

「そうよ。それでも悪い話じゃないでしょ」

「それもそうかって納得できると思うか？」

「別に納得しなくてもいいから」

妹の言葉はさばさばしている。素っ気無さも「ここまでくると見事であった。」

「現実だし私のことじゃないし」

「そういう御前だったな」

「私だつてかなり気にしてるけれどね」

歯を磨いている妹の顔が少むっとなっていた。

「だつて。額が」

「女も禿るのかよ」

「額が広いと言われるわよ。それに薄毛だつてあるし」

「そうなのか」

「そうよ。だからお兄ちゃんは覚悟を決めなさい」

「だからどうしてその理屈になるんだ？」

幸三には訳のわからない理屈だった。髪を垂らし続けながら無愛想に返す。

「御前の髪と俺の髪は関係ないだろ」

「血筋よ。お父さんのね」

「代々若禿のか」

「そうよ、同じだからね」

また言うのであった。

「私だつて。実際に」

「禿は辛いな」

「まあ明るくはなるけれどね」

「こんな明るさはいるかよ」

むっとした言葉をまた出したのだった。

第四章

「全くよ」

「まあまあ。じゃあ私歯磨いたから」

「ああ」

「交代よ」

洗面所の鏡の前から離れるというのだった。

「後は私がね」

「ああ、じゃあな」

何とか髪で額を隠したのだった。そんな毎日を通じて幸三だった。しかしである。額は少しずつ拡大していく。それはまさに砂漠化であった。

学校でもだ。皆がそのことを言う。今ではそのニックネームまで決まってしまうていた。そのニックネームが彼にとってはこれまた不本意なものだった。

「よお、若ハゲ様」

「ライトヘッド、元気か？」

「そうしたニックネームはもういじめどころか人権侵害じゃないのか？」

むくれた顔で楽しげに声をかける皆に返すのだった。

「何だよ、若ハゲだのライトヘッドって」

「じゃあ和尚な」

「それか和田選手か？それとも谷村さんでいいか？」

「最後の二つは完全に本人さんに対する名誉毀損だよな」
同じ悩みを持つからこそわかることだった。

「幾ら何でもそれはないだろ」

「それじゃあ磯野さんでいいか？」

「漫画のキャラでな」

「それか大ちゃんな」

漫画と野球選手であつた。

「まあよ。髪の毛以外のことは言わないからな」

「それは安心してくれよ」

「それが一番言われたくないんだよ」

「牙さえ出かねない言葉だった。」

「髪の毛とか額のことかな。しかしな」

「しかし？」

「どうしたんだよ今度は」

「いや、とにかく俺はそればかりなんだな」

「無然とした顔である。」

「全くな。どうなんだよ」

「だから諦めろって」

「運命を受け入れるんだ」

「何処の拳法伝承者なんだよ。全くよ」

「そんな話をしていた。そしてその時だった。」

「不意に校門の方から悲鳴があがった。絹を切り裂く様な。」

「こ、来ないでよ!」

「先生、先生!」

「んっ、何だ?」

「何があつたんだ?」

「幸三だけでなく皆もその悲鳴を聞いて関心をそちらに向けた。」

「まさかと思うけれどな」

「暴漢とかか?」

「だったらまずいな」

「幸三もその危険を予測して眉を顰めさせた。」

「そんなのが来たらな」

「っていつかそれなんじゃないのか?」

「おい、どうするよ」

「皆それぞれ眉をしかめさせてだ。真面目な顔で言い合っ。」

「銃とか持ってたら」

「いや、流石にそれはなくても刃物は持つてるだろ」

「警察呼ぶか？」

一人が携帯を出してきた。

「それならな」

「ああ、それならな」

「今はな。そうするか？」

「だよな」

「それより前にだよ」

ここで幸三が皆に対して言った。

「警察呼んでも来てくれるまでに時間があるだろ」

「ああ、少しな」

「じゃあそれまでは」

「とりあえず女の子とか守らないとな」

彼はすぐにこの判断を下したのである。

第五章

「だからバットなり箒なり持つてな」

「ああ、若し変質者とかだったら叩き出そうぜ」

「俺達でな」

皆その真剣な面持ちで頷き合った。そうしてだった。

手にそれぞれバットなり箒なりを持つて校門のところに行くのだ。やはりいた。

目がいっついていて髪の毛を短く刈っている。眼鏡が異様に大きい。

小柄であるがその手に何処からか持つて来たバールの様なものがある。それを手にしてそうしてこんなことを喚いていたのであった。

「女の子はいないか！」

「女の子って」

「いきなりかよ」

「女の子だ！女の子を出せ！」6

こう言っただけで喚いていた。その手にあるバールの様なものを振り回してもいる。

「そして俺の彼女にしろ！誰か出せ！」

「頭がおかしいな」

「ああ、間違いないな」

「どう見てもな」

皆その変質者を見て口々に言う。

「さて、その変態だけれどな」

「どうする？あれ」

「よってたかつてボコって取り押さえるか？」

誰かがこう提案した。その手にはそれぞれバットや箒、トンボといった得物がある。幸三にしてもその手にはちゃんと剣道部から借りた木刀がある。

皆そういったものを持っているから比較的強気だ。そしてそのう

えで話をしているのだ。

「それとも警察呼んでるしな」

「それまで待つか？」

「困んだままな」

こつした考えも出た。とりあえず今は困んだままだ。

しかしであった。その変質者が動いたのだった。

突然前に出た。叫びながらだ。

「女あああああー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

「げっ、来たぞ！」

「いきなり動いたのかよ！」

「やばいぞこれは！」

流石に困んでいれば用心して動かないと思っていた。しかし相手は動いた。そうした意味で彼等の予想を遙かに超えていたのだった。

そしてだ。その変質者は幸三に向かって突き進んできていた。そのバールの様なものを振り回しながらだ。そのうえで来たのである。

「お、おい和田！」

「危ないぞ！」

「そつち行つたぞ！」

皆でそれぞれ幸三に告げる。

「突け！突きだ！」

「それでいけ！」

「屈め！」

「あ、ああ！」

幸三も仲間達の言葉に頷いてだ。そのうえで身構える。そしてその時に。

第六章

一陣の風が吹いた。するとだった。

前髪が揺れ動いた。それで額が出てしまった。やたらと広く輝く額がだ。

そう、彼の額は輝いていた。太陽の光を反射した。その光が変質者の目に入ってしまったのである。

「うっ！」

「光!？」

「光が入ったのか」

「みたいだな」

周りの面々がそれを見て言った。

そしてだ。全員でその動きを止めた変質者に殺到する。そして一斉に蛸殴りにしてしまった。

蛸殴りにされた変質者はボールの様なものを取り上げられそうして縛られてしまった。そのうえで警察に突き出され話は終わったのだった。

その話が終わったところだ。皆は幸三を見て言うのだった。

「今日は大活躍だったな」

「そうだよな。御前のお陰だよ」

「御前がないとな」

「それは喜んでいいのか？」

だが当の幸三は一人無然としていた。

「それはな。喜んでいいのか？」

「だからそれはいいだろ」

「なあ。それはな」

「実際に変質者を止めたんだぞ」

「喜ぶべきことだろ」

「複雑な心境だな」

当人の言葉だ。

「全くな。俺の額でか」

「ああ、御前の禿のお陰だよ」

「若禿のな」

「そのせいで御前も助かったんだぞ」

「このことも言うのだった。」

「禿頭でなかったら御前今時どうなっていたのかわからないからな」

「だから喜べよ」

「なあ」

「助かったんだからな」

「禿でいいのかよ」

しかし当人はまだ言うのだった。

「俺は。それでもか」

「禿だから別に困る訳じゃないだろ」

「まあ長い友達でいて欲しいのはわかるさ」

「それはな」70

しかし皆今は変な顔で笑っていた。

「けれど今回ああいうことになったんだしな」

「別にいいじゃないか」

「俺もそう思うぜ」

「そうか？」

本人だけは納得しないままであった。

「俺はそういう風には思わないけれどな」

「まあ今回は喜べよ」

「それでいいじゃないか」

皆の言葉が少し変わってきた。

「勝ったことは勝ったからな」

「それでな」

「そこまで言うのならな」

幸三もここで遂に納得したのだった。まだ釈然としないものがある

つたがだ。

一応頷きはした。だがそれでも表情は晴れない。その顔でだ。

「禿も時として役に立つのか」

「だから坊さんになれよ」

「すつきりするだろ」

皆また言うのであった。

「なっ、禿げたらそれでもな」

「それでいいだろ」

「もう覚悟決めろよ」

「とにかくこういうことがあったりするのわかったさ」

まだ言う彼だった。

「それはな。しかしな」

「しかし？」

「まだ諦めないのかよ」

「諦めてたまるか」

彼も本気だった。

「何があってもな」

「やれやれ、運命は受け入れないといけないのにな」

「そうだよな。それでもそんなこと言うなんてな」

「往生際の悪い奴だよ」

皆生暖かい笑みになっていた。

「それでも頑張るんなら頑張るんだな」

「髪の毛のことな」

「精々な」

「絶対に諦めないからな」

幸三も意固地になっていた。

「俺は絶対にな」

こう誓った十七の時だった。そして数年後彼はとある寺の住職に迎えられていた。その頭には髪の毛が一本もなかった。ただしそれは剃ったものではなかった。その必要がないようになっていたので

ある。

若き禿の悩み

完

2
0
1
0
・
4
・
3
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1381o/>

若き禿の悩み

2010年10月8日12時12分発行